



ツナガル

教育長 津野庄一郎

先日（11月27日）、関川小学校の5年生が、自分たちで育てた関川産コシヒカリ（^{きずなまい}絆米）と商品化したレトルトカレー（しいちゃまカレー）を新潟市中央区のピア Bandai で配布・紹介しました。一生懸命に呼びかける子どもの姿が目に見えます。一方、関川中学校の3年生は、過日（10月31日）、ハーティープラザ関川で合唱を披露したとのことです。「ひ孫のような生徒さんの姿は何ともキラキラと輝いて見えた」という事業者からのメッセージが目に残りました。こうした実社会とつながるアウトプットの学びこそ、関川村の教育の^{かなめ}要です。子どもたちを導いた教職員並びに協力して下さった各事業所の皆さんには感謝しかありません。

11月26日、胎内市で開催された「小中一貫教育新潟県連絡協議会総会・研修会」にオブザーバーとして初めて参加しました。すでに三条市や十日町市など一貫教育を取り入れている市町村や関心のある教育委員会（9つ）で組織しています。関川村は「保・小・中連携プログラム」に基づいて教育活動を推進していますが、将来を見据えて様々な情報や新たな知見を得る貴重な機会ととらえています。現在、須貝学校長（関川小）を中心に令和7年度版プログラムの作成を進めており、その内容とさらなる連携強化に期待を寄せているところです。研修会では文部科学省主任視学官の田村学様から「主体的・対話的で深い学びを改めて考える」と題した講演がありました。その中で「深い学び」は、知識・技能をつなぐ（関連付ける）こと。すなわち既存の知識と知識を結び付けていくことが重要であると強調されました（^{せいち}知のネットワーク化・精緻化）。一方、デジタル学習基盤による学びは、地域・学校・教師で格差が広がっているとし、デジタル機器の活用は、子どもの「個別最適な学び」と「協働的な学び」に欠かせないと話されました。

これを関川村の教育に当てはめるならば、上記に加え、子どもの価値ある体験と学習をつなぐこと、そのためにも書くこと（板書とノート指導・書写）をおろそかにせず、タブレット等のデジタル機器を、子どもの発達段階に応じて、適切に活用できるようにすることが大切だと考えます。子どもが鉛筆（筆）をもって書くことで文字の形を正しく認識し、主語と述語の関係をとらえた文章を書けるようにすることが、論理的思考力を高めることになるからです。文章をコピーして貼り付けたり、AIによる情報を丸写ししたりしては、学力は身に付きません。

穴埋めの知識で終わらない深い学び、体験と学習が往還する学び、そんな学びを遊びや生活科・総合的な学習の時間をベースに、保・小・中、そして家庭・地域へとつなぎ、広げていけたら、関川の子どもたちはどんなに幸せでしょう。

【写真】ピア Bandai で関川小の取組を紹介する大型モニター（左）・合唱を披露する関川中3年生(右)